
俺と幽霊と恋物語

杞憂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と幽霊と恋物語

【Nコード】

N 6 1 1 3 X

【作者名】

杞憂

【あらすじ】

心霊、怖い話が大好きな莊介が心霊掲示板で謎のスレで何かをダウンロードした。なんとそれは幽霊だった！

幽霊は夜な夜な現れ莊介を殺そうとするがいつも殺せないでいる。

そんな二人の物語にしよう！………みたいなの？

俺と掲示板と幽霊！？（前書き）

こんにちは、杞憂です。

話の案だけ浮上して文章化するのにかなりの時間を使ってしまった

（；□；）！！

同時にハルカの季節も書いてます

そっちもヨロシクお願いします

俺と掲示板と幽霊！？

チンチンン……

⌈
⋮
⌋

仏壇の前に両手を合わせる。

(父さん、母さん。おはよう。)

これは俺——そうすけ 莊介の一日の日課である。

一年前、事故にあつた両親は俺に遺産と家と想い出だけを残して他界してしまつた。

それから自分では炊事洗濯を自分で出来るように毎日を頑張ってきてきた。

その甲斐があつて今では人通りの事は簡単にこなせるようになった。

両親の他界から約一年が過ぎ、俺は親のお金で星陵学園に入学した。周りの皆は優しいヤツもいれば楽しいヤツらばっかだ。毎日が飽きなくていい。

何時までも手を合わせてはいられないので立ち上がり学校へ向う。

(いってきます。父さん、母さん。)

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

ミンミンと蝉の鳴き声が鬱陶しい《うつとつしい》とすら感じる夏場。

学校へ向う途中、電柱があり近くに花を生けたガラス瓶がある。これも俺の日課の一つで、ここを通りすぎるときは必ず目を閉じお参りをする。

「本当に荘介は律儀だねえ。」

「ん？ああ、神奈か。」

瞳に光が差し込むと目の前には神奈^{かな}がいた。

彼女は小学校からの知り合いで、よく神社で遊んだりもした。

神社つてのは、彼女の家は古くからの神社の神主さん、つまり彼女の両親が神主さんだから友達の家遊びに行くノリでよく遊んでたし、神主さんも了解していた。

神社で遊ぶだけだった神奈も今ではお手伝いとして巫女をしている。

「そこにはもう誰も居ないわよ。」

「そつなのか？やっぱ見えるヤツはいいなあ。」

「そんな事ないよ。見えたら見えたで怖いし……」

彼女はどうかやら靈感があり幽霊が見えるらしい。

本人は見たくないらしいが俺からしてみれば逆に羨ましいとさえ思っている。

靈感があれば、幽霊が見えれば、両親に会えれば………何度思ったことが分らない。

「そんな事より早く学校行こ。」

「ああ、…」

10分位歩いた場所に俺達が通う星陵学園がある。

スリッパに履き替え、自分のクラス——1年2組の扉を開ける。

「おはよー。」

「よう、莊介。おはよー」

「莊介君おはよう、神奈ちゃんも。」

「神奈さん、おっはー。」

「莊介、莊介、スラマップギ〜。」

「おはよう、それと便座カバー！」

……… やっぱ個性的なクラスだなあ…

「おい、莊介！これ貸してやるよ。」

「えっと〜……… 中身は？」

開けてみればわかると言うので袋からモノを取り出す。
中にはDVDが入っていた。

「呪○じゃん！貸してくれるの？」

「ああ、お前最近観たいっていただろ？だから中古で買ったんだよ。」

「ありがとうな、信也！」

「良いって事よ。見終わったら返せよ、俺まだ観てないから。」

友達の信也しんやから貸してもらった○怨のパッケージを見ながらワクワクする。

「莊介……まだその趣味あったの？」神奈が俺に少し怒った様な態度で接してくる。

「ん？ああ！ホラーは最高だからな！」

「いい加減それ辞めた方が良くよ。何かあつたら手遅れなんだよ……」

「それは経験から言ってるのか？」

「……………」

「え、まじ？……」

「あ、シुकダイヤルノワスレター。ヤラナイトイケナイナアー」

「棒読み過ぎだよ……！」

「ラ○イカル・グッド・スピー○……！」

「また世界を縮めるの!？」

「そんな事ないよ。桐生ミ〇リさん。」

「莊介です!『〇守です』って言いたい所だが……」

結局これだけのやり取りをして授業が開始された……

「ただいま」

誰も居やしない我が家に帰りを報告する。

自分の部屋に行き、私服に着替えてパソコンを起動させる。

某検索サイト『〇a h o o!』で『心霊掲示板』と打ち込み書き込みを流し見をする。

マウスのコロコロを弄りながら見ていくとコツクリさんや、メリーさん等や都市伝説も書いてあり、そこに皆が議論しあってる。

何も考えずそのページを眺めていたら、URLのみ載せたスレがあった。

「何だ、これ……」

h t t p : / / w w w . 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 ……

こんなの見たことない……

興味がわきURLにマウスポインタを合わせる。
すると新しくスレに書き込みが出てきた。

『好奇心は猫も殺す』

忠告？いや、警告なのか……？

一瞬怖くなりポインタをURLから外す。

もしかしたらただの釣りでリンク先はアダルトサイトだったってオチがあるかもしれない……

「もしかしたら、ワンクリック詐欺のサイトへの誘いかもしれない
く………どうすっかなあ………」

——カチ。

ん？

カチ？

何の音——つてツツオイ！！

画面を見るとマウスポインタはいつの間にかURLの上に取り
クリックしていた。

何かのページが開かれると同時に質問された。

『ダウンロードしますか？』

『はい、いいえ、どちらかと言えばはい』

……いやいやいや！

しないしないよ！
怪しすぎでしょ！？

当然『いいえ』に
力チ。

—— つてツツオイ！！

マウスポインタが勝手に動き『はい』がクリックされ何かをダウンロードし始めた。

「どうなつてんだよ……」

電源ボタンを連打しても画面は変わらずにダウンロードも進んでいく。

80%……90%……95%

急いでキャンセルをクリックしようと思ってもマウスポインタは微動だにせずダウンロードは完了した。

…… 100%

……… あれ？

何も起こらない……

てっきり、今のでウイルスが感染したかと思っただけで何も起こらない。

念のためウィルスバス〇ーを確認してはみるが異常ない。

「なんだっただ……？」

それに俺は何をダウンロードしたんだ？

さっきの掲示板に行ってみたが、スレ自体存在しなかったのか跡形

も無くなっていた。

謎しか残していかなかったそれは何なのか……
何故か嫌な予感しか感じられない。

もしかしたらパソコンの何処かイカれたかも知れないから動作確認を兼ねてニコニコ動画に行く。

動作確認とか格好良く言ったが短編ホラーを観すぎて本来の目的すら忘れて耽っていた《ふけていた》。

〒〒〒〒〒〒〒〒〒

その日の夜、あまり寝付けなくベッドで何度も寝返りをうつっていた。ブランケットを掛けているだけなのに身体は灼熱地獄の様に熱く、冷房がついてるとはとても思えなく逆に、暖房がついてるとさえ錯覚してしまう。

そんな中、俺は意識を失う様に眠りに墜ちる。

意識を取り戻すと身体は動かず、目蓋すら開かない。

身体は未だに熱いが、首と腹部が冷たくて気持ち良い。

開かなかった目蓋が自然に開いた。瞳に薄暗い光が入ってきて視界を回復させたが、俺の瞳に信じられない光景が入ってきた。

それを見た瞬間に身体中の熱は消え冷や汗をかき始めた。

俺に馬乗りにして両手で首を絞めている女がいる。

髪はボサボサと乱雑に伸びており、着ている白装束には血がベッタリと付着していた。

一目見てわかった……

——幽霊だ!!

実際に心霊現象にあつてみると映画とかと違って断然に怖い。僕は死を直感的に悟った。
悟ったのだが……

(絞める力、めっちゃ弱い!)

『絞めてる』というより『手を這わせてる』みたいな感じだ。

「はあ、はあ、……んん!んあ……んっ!」

女の幽霊が力を入れているのは声からして解るが、漏らしてる声がいやらしすぎる!!
それに……

俺は視線を幽霊から逸らす。
怖いから?——違う。
いやらしい声を出すから?——違う。
そうじゃないんだ。
だって、この女の幽霊……

「おっぱいが…見えてる………」

「っ／＼!!!?」

白装束が着崩れしてポロリみたいな感じ……?
酷くビクリした様子の女の幽霊は顔を真っ赤にさせ、絞めていた?手を離し胸部を両手で隠した状態ですう／＼と部屋の壁紙に溶け

ていくように消えていった。

気付けば身体は自由に動き熱も無くなっていた。

床で寝るときはご注意を（前書き）

杞憂です

久しぶりの投稿です

床で寝るときはご注意を

どうしてこうなったのだろうか・・・

朝から気が滅入ってしまう。

今日の深夜に起きた事――

寝不足で欠伸^{あくび}をかき通学路を歩く。

そしてあの電柱に着く。

いつもどおりに手を合わせ目をつぶる。

「本当に律義だね・・・」

「・・・神奈か。」

「なんかあったの？」

「いや・・・何もないよ。」

「えっ・・・そう。」

納得のいかない様な、どこか悲しい様な表情を浮かべてお互いに通学を再開した。

教室に入るとクラスメート達が声をかけてくる。

「莊介〱おはよ」

「すらまっぱぎ〜」

「おは〜ご両人〜」

「オリバーソース（早口）」

俺はそれらを見殺しして自分の席に着く。

周りから荘介がおかしいiiiiiiiiiiii!!などと声が聞こえてきたので、仕方なく答える。

「昨日あんまり寝られなかったんだよ……済まんがしばらく寝させてくれないか？」

そう言うとはわかってくれた様で周りには誰もいなくなった。

|||||

————夢を……夢を見ていた。

夢の中には、小さな女の子と、小さな男の子だけ。

何をするわけでもなく、ただそこにいつまでも立ち尽くし泣いている女の子……

何をするわけでもなく、ただそれをいつまでも見ていた男の子……

これを見て聞いている俺も悲しくなり泣き出したくなってくる。

『ねえ、どうしてないてるの?』

ぐす、グスンと鼻を鳴らしながら涙を服の裾で拭いながら女の子は泣き続ける。

「莊介！！私の授業で寝るなんてよい度胸だな……」

くっ……

何てこった。

一限目は撫子先生の授業だったんだ……

2年2組担任の撫子先生——通称なっちゃん。
(何故か)日本史、世界史を担当する美人先生。

「まったく、莊介。どうしていつもそんな態度をとるんだ！」

いや、なっちゃんの授業じゃ一回目なんですが……

「ごめん、なっちゃん。眠たかったんだよ……許してください。」

「そうだな……じゃあ私の代わりに教科書54ページを読め。」

よかった！

これだけで。

なっちゃんはいつも寝てたりしてる生徒を色々な罰《制裁》を与えてるらしいからな……

真面目に避けなければならぬ……

「ああ、そうだ、莊介。後で職員室来い。可愛がつてやる……」

……ああ
回避出来なかったみたいだ

時間は経ち放課後になっちゃんに反省をさせられた。
反省室にいれられ、反省文を書かされその後は……止めよ。
思い出すと涙が出てくる……

「ただいま」

誰もいない家に言の葉は木霊する。

（父さん、母さんただいま。）

立ちながら仏壇に手を合わせ挨拶を済ますと自室に赴く。
昨日の幽霊はパソコンで掲示板で何かをダウンロードしてから現れた……

自然に考えれば原因はダウンロードした掲示板だろう。

勇気を出してパソコンで、もう一度あの掲示板を訪れることにした。

だが、掲示板自体はあったが、件のスレは存在しなかった……

今更だが、恐怖心が底から沸き上がり身体を、心を冷やしていく。

そうしてまた、夜が訪れる――

☐ ☐

カチカチカチと目覚ましの秒針がメトロノームの様に均等な速さでリズムを刻む音だけが自室の空気を支配する。

昨日の様に体は熱くはないが、身動きがとれない……

体が動かないから目で周りの状況を確認する。

辺りはいつもと変わらない、しかし、空気は違っていた……

例えるなら……いや、例えられない。

こんな感じは初めてだ。

嫌な空気に包まれるだけでなく、

胃酸が逆流して喉元を駆け巡る様な気持ち悪さ、

自分の周囲に存在する万物から一斉に視線を感じる様な気持ち悪さ、そして

今にも叫びだしたくなる様な焦燥感、

今にも逃げ出したくなる様な焦燥感、

それらが一度に俺の中に現われグチャグチャと掻き回され掻き鳴らされる。

程なくすると部屋のドアがノックする音が聞こえた。

だがそれは手で叩くのではなく、身体全体で当たってる音に近い。

音は部屋全体、頭や耳に響き渡る。

$$\begin{aligned} \Gamma &\subseteq \Gamma \\ \Gamma &\subseteq \Gamma \\ \vdots \\ \Gamma &\subseteq \Gamma \end{aligned}$$

「うるさいんだよ!!!」

ハアハアと息切れをしていた。

気付けば体は自由に動き、嫌な空気や音は消えていた。

ベッドから降りドアを開けてもそこには何も無く、いつもとかわりない。

安心してドアを閉める。

だが、ドアが上手く閉まらない……

足元を見ると人の腕とは思えない位真つ青な片腕がドアに挟まっていて蠢いていた。

出せる力を全て出してドアを閉めようとするがビクともしないどころか、もう片方の腕が入ってくる。

頭と腰が入って来た所で俺はドアを離して部屋の隅に逃げる。

床を這いながらゆっくり此方に向かってくる幽霊は壁に手を着き、爪痕が残るくらいの力を掛けてゆっくりと立ち上がる。

立ち上がると言うよりも井戸から這い上がってくるの方が良いのかも知れない

立ち上がるとフラフラとした足取りでまた此方に向かってくる。

もう駄目だ……

映画やゲームだとこの後は死ぬかゲームオーバーだ……

力一杯使って目を閉じ、体を丸める。

だが、何もない起きない……

暫く同じ姿勢で待っていたが何もない起きない。

様子見のつもりで片目を開けた――

「……………あれ、消えた、のか？」

気配も無く消えた幽霊……………そもそも気配なんかあるのか？

暫く周りを見渡したが幽霊なんて何処にも居なく、さっきまで何を体験したんだよってツツコミたくなってきて安堵した

不意に足元を視線を落とすと俺の腰にさっきの真っ青な両腕が絡み着いた。

「……………シネ、」

耳元から女性の声がした。

だが女性と言っても何でそう理解出来たか解らない。それくらい、どす黒く、枯れた声であった。

そして後ろでは、幽霊が俺をそのまま持ち上げ、ブリッジの体勢に入り、まさかの――

「ジャーマン……………スープレックスだ、と……………」

気付いたときには遅く、俺は床に頭を打ち付けられていた。

幽霊が人間にプロレス技かけけるか？否、かけるなんて可笑しい！聞いた事無いよ――！

初めは何が起きたか解らなかったので痛みを感じなかったが状況を理解すると、途端に頭部に激しい痛みが襲ってきた。

「くそイテェー！でも、何だ、この背中に押し付けられてる柔らかい感覚は……………」

「／／／！！」

声にならない声が何処からか聞こえてきてブリッジの状態が解除され、何故かキックをおみまいされた。

さっきまでホラー映画の幽霊みたいなフラフラな足取りだったのに今は見事な蹴りを放ってくる。

まあ、もう、良いや…………

頭部の痛みが余りにも酷く、そのまま床で一夜を過ごした。

朝――

小鳥たちがチュンチュンと短い鳴き声で語り合っている。

その話し声で目を覚ました。

体のあちこちが痛かった。上体を起こし周りを確認する。

「……………何で床なんかで寝てるんだ？」

やばい……………記憶にない。

この年にして若年性アルツハイマーか？

頭を押さえながら立ち上がる。

「あれ、何か首の辺りが痛い……寝違えたのかな？」

部屋を出てシャワーでも浴びようと思ってドアノブに手をかける。
が触れた感触がいつもと違っていた……

視線を手元に浴びせるとドアノブには無数の長い髪の毛が絡まっていた。

「って、うわあああ!!」

ビックリした拍子に自分の足につまずいて尻餅をつく。
さらに視界に何か違うモノが映った。

壁だ――

壁に何かで引つ掻いた様な五本の痕があった。
手を合わせると爪痕だと解った。

そこで総て思い出した。

気分が悪くなった。

だが今日は平日、

学校を自主休講するわけにはいかない。

ひんやりとツメタイカッターシャツを羽織り、鍵をかけて学校へ向
う……………

〒〒〒〒〒〒〒〒〒

深夜2時頃

まただ……金縛りだ。

今日の幽霊はえらく直球な事を始めた。

天井に無数の包丁がゆらめき、ベッドの傍らには幽霊。

「、、シネ、今度こそ、はっ、はっ……」

は？

「はくちゅん！」

クシャミだった、しかし包丁は糸が切れた様に重力に従い垂直に落下してきた。

ドス、ドス、どすどす

「うわあああ——って何すんじゃゴラあ——！」

ゴッソ——

俺はベッドから飛びはね幽霊をゲンコツで頭を打つ。

「痛い！なっ！なにするのよ——！」

「俺が言いてえよ！」

「てか、何で生きてるのよお、今回はちゃんと出来た《ヤッタ》と思ったのに……」

実はあの時包丁は俺の肌ギリギリをかすめていたのだ。
たぶんさっきのクシヤミで狙いを外した、と思う……だが、腕に切れ傷ができてしまった。

[illegible]

ゴツン！！！！

「痛つ……何で打つ《ぶつ》のよ！お父さんにも打たれたこと無いのに！たぶん！！」

ゴッソん！！！！

「打ったね……一度も……」

「いや、二度目だな。」

「細かい男……そんなんじゃ世界一のプロレスラーにはなれないよ？」

「いや、なる気無いし」

「それは本心では無いよ……本当は君は歌手になりたいんだろ!!」

「それも無い。てかプロレスラー何処いった。」

「じゃあ、プロボクサー？」

「違う。」

「プロの内職家？」

「何だそれ……あつたとしても絶対違う。」

「フードファイター!!」

「目を輝かせても、違う。」

「……」

「……」

「じゃあ何なのよ!……!……!」

「えー逆ギレかよ……」

その後俺はこの女幽霊とどうでもいい会話をしてしまい、その日寝ないで学校に行く事になった。

床で寝るときはご注意を（後書き）

まだ主人公やヒロインの設定が固まって無いWWW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6113x/>

俺と幽霊と恋物語

2011年12月18日17時52分発行